

考えてみよう! の〈答〉

(P.026)

- (1) Xあるいは、Y
- (2) Z
- (3) Xあるいは、Y

第2章

幸福の計算

幸福を測る

世の中の重要な関心事に

お金で幸福を買えるか？

ということがあります。もちろん、幸福はお金で買えるものではないし、そうあるべきではない、ということもわかります。でも、ここでは経済学者の分類に従って人間の幸福を「精神的な幸福」と「物質的な幸福」に分けて測ると、物質的幸福はお金で買うことができます。それだけではなく、物質的幸福の量とお金の量との間に何かしら関係がありそうなこともわかります。「回転寿司」へ行ってみましょう。トロやウニなど美味しそうなものは値段が高い。だから

すぐには売れず、いつまでも回っている。一方、サーモンや玉子などは値段が手頃なのですぐに売れて、お皿だけがグルグル回っている。お寿司の与える幸福はいちおう物質的幸福ですが、お金で買えるのみならず、そのお金の量と関係します。つまり、人間の物質的幸福は、いちおうは数量で測れる、つまり数量化できるということになります。もっとも、お金による測り方が特別に大切だという哲学的根拠はありそうもないので、どんな測り方が人の物質的幸福の測り方の必須条件になるか、理論的に探ってみる価値はありそうです。

実にこれは重要なことなのです。今日、国家の最重要目標には「人々の物質的幸福を最低限に保障すること」が掲げられていますが、その前提としてそのような幸福は測り得るということがあるからこそ、予算の配分、それによる政策の決定、評価が可能になるのです。もしそうでなかったら、まっ暗ヤミの中で、両手で空を掴み、空を斬り、むなしく手を泳がせるだけになってしまうでしょう。

次に、人々の精神的幸福についてはどうでしょうか。もともと、西洋には数々の幸福論があります。メーテルリンクの『青い鳥』をはじめとして、ヒルティ、ショーペンハウアー、B. ラッセルなどはすぐあげられます。日本でも『方丈記』の作者・鴨長明は文字どおり山中の一丈か数丈くらいの庵に住み、孤独だけれども風雅と達観を楽しみました。数丈四方の庵の土地や建物などいくばくでもないでしょうから、この幸福はお金に換算できないでしょう。とこ



ろで、人は「愛される」方が「愛されない」よりは幸福であることは大方の真理でしょうから、こういう「よりは……」の方法なら測ることは可能です。しかし、この測り方でも「愛する」のと「愛される」のとはどちらが幸福か、という問いには答えられませんし、そもそも比較さえ可能かどうかもわかりませんね。さらに、殉教者はなぜ「死」を「生」よりも崇高な価値と思うのでしょうか。普通の人には「死ぬ気でやるなら、生きていてどんな苦痛や困難もむしろ容易だろうに」と思っています。聖書にある「与うるは受くるよりも幸なり」To give is more *blessed* than to receive のように、経済原則とは反転した価値観もあるわけです。^{ハッピー}happy は多分に物質的幸福を含みますが、^{ブレスッド}blessed とは精神的幸福、満足感を意味しています。

しかし我々は、これは精神的幸福だ、これは物質的幸福だ、とはっきり分けて感じているわけではありません。こういうのは分かち難いものです。たった一人の人間でさえこうなのですから、多くの人々が集まった社会で、どのような社会がよいのかを評価するのはとびきり難しいことであるでしょう。物理学の素粒子論などの難しさとは異質な困難です。完全な理論はもちろん、満足な理論も存在しません。ではたとえば数学的に幸福の計算をとらえると、どんな考えが導きだせるのでしょうか。基礎理論の入口を紹介していきましょう。

社会は個人からできています。だからまず個人から出発します。いわゆる「個人主義」でなく、方法論的個人主義です。

幸福計算の最初の考え方

19世紀の初め頃のイギリスの哲学者で法学者でもあるジェレミー・ベンサ